

松戸市における「祖父母（シニア）世代の子育て支援意識」調査 — 聖徳大学地域貢献事業「松戸子育てカレッジ『子育てサポーター講座』」の発展・充実に向けた基礎研究 —

梶 瑞希子・藪中 征代（教職研究科）

「松戸子育てカレッジ『子育てサポーター講座』」の教育プログラム開発・充実に資することを目的として、松戸市在住の50歳代～70歳代の子育て支援意識のありようを探る質問紙調査を行った。回収票のうち条件を備えた268票を分析し、全国的な調査と対比した。また、二つの特徴あるグループ（大学公開講座会員、ファミリーサポート会員）の支援意識の違いを明らかにした。住民の関心の所在に合わせた取り組みの必要性が明らかになった。

キーワード：子育て支援、シニア世代、意識調査、地域貢献、多世代協働

I. 本調査研究の目的と方法

本研究は、松戸市在住の50歳代～70歳代を祖父母（シニア）世代と呼び、その子育て支援意識のありようを明らかにすることによって、後述の「松戸子育てカレッジ『子育てサポーター講座』」の教育プログラムの開発・充実に資することを目的とする。同じ目的で、乳幼児の保護者に実施した「子育てに関する調査」（平成27年度）に続く調査研究である¹⁾。

方法は、質問紙調査である。調査票は2016年に計974通を配布し、575通を回収した。本稿では、その一部を分析対象としている。実施に先立っては、聖徳大学倫理委員会宛に倫理審査申請書を提出し、承認を得ている（申請番号H27U029）。

執筆の分担は、「I. 本研究の目的と方法」「II. 調査概要と調査の結果（1）」は梶、「III. 調査の結果（2）」は藪中である。

(1) 「松戸子育てカレッジ『子育てサポーター講座』」

「松戸子育てカレッジ」（以下、子育てカレッジと表記）は、聖徳大学短期大学部保育科（以下、保育科と表記）が千葉県松戸市と連携して進める「信頼と共感でつなぐ“ふるさと松戸”づくり—多主体間協働で—」（文部科学省補助「地<知>の拠点整備事業」平成26年～30年度）の一環である。聖徳大学10号館生涯学習社会貢献センター内に、平成27年9月に開校し、大学事務組織の「知財戦略課・地域連携課」（以下、地域連携課）と保育科の協働態勢で、子育て関連の内容に特化した事業を展開している²⁾。

「子育てサポーター講座」は、子育てカレッジ事業の一

つで、地域の祖父母を含む子育て終了世代などを対象とする公開講座である。会場の生涯学習社会貢献センターは、松戸駅東口徒歩1分とアクセスが良いだけでなく、平成4年開校の聖徳大学オープン・アカデミー（以下、SOAと表記）の多種多様な公開講座（会員制・有償）の会場として、地域住民に広く親しまれている。

「子育てサポーター講座」はSOAとは異なり、会員制ではない。地域連携課を窓口とし、参加希望者に事前の申し込みを求めているが、随時の参加が可能で、費用は保険代金（参加回ごと100円）のみである。開講回数は、平成27年度は計5回、平成28年度は4月、9月、1月を除く各月1回、年間9回を計画し実施中である。参加者は、初年度は毎回一桁であったが、平成28年度は、年間計画表が松戸市の広報に掲載されるようになったこともあって、各回十数名程度に増えている。ほとんどが女性で、連続受講者も多い。

講座の内容は、保育科内に設けた運営委員会委員が年間計画を立て、講師は保育科の教員が交替で担当している。平成28年度は、食育、絵本、小児保健、心の育て方、海外子育て事情、子どもの絵、人形劇、子どもへの働きかけ方など、子育て支援に有用な実践的・教養的な主題を取り上げている。講義だけではなく、希望者には、子育て支援広場「おやこで“ゆるりん”」での子育て支援実地体験の機会を提供しているのも、大きな特徴である。

“ゆるりん”というのは、子育てカレッジのいま一つの事業で、毎金曜日の10時～12時に開所している。平成28年10月からは、隔週月曜日も開所するようになり、こ

ちらは4年制の児童学部が担当している。地域連携課の職員と短大・学部教員が運営にあたり、乳幼児と保護者が立ち寄り、学生が授業やボランティアで加わることから、多世代が集う場となっている。

(2) 多世代協働

すでに動き出した「子育てサポーター講座」について、改めて祖父母（シニア）世代の子育て支援意識を調査したのは、以下のような理由からである。

高齢者と子どもとの関わりについては、介護保険法施行（2000年）の前後より、「世代間交流」研究として取り組まれてきた。介護保険法の施行から十数年を経た今、働き盛りだった「団塊の世代」（1947～49年生まれ）は労働市場から退場し、平成37年（2025年）には全員が75歳以上の後期高齢者となる。

この十数年で労働環境は大きく変わった。1990年以降、34歳以下の若年層の非正規雇用化が進み、子育て世帯の家計が厳しくなったことから、妊娠・出産後も就労を継続したり、子どもが小さいうちに再就職したりする母親が増えた。子育て世代の共働きが一般化したことによって、都市部を中心として、3歳未満児の深刻な保育所不足を引き起こしている。ここ数年で、認可保育所や認定こども園といった公的保育施設の定員は大きく伸びてきてはいるが、待機児童問題は相変わらず深刻である。定員急増と処遇の低さを理由とする保育士不足も、さらなる拡充を阻む要因となっている³⁾。

松戸市では、国に先駆けた小規模保育施設の整備や待機児童解消に向けた対応策によって、平成28年4月1日時点において「国基準でみた『待機児童数ゼロ』」を達成している⁴⁾。したがって、待機児童対策の緊急性がそう高いわけではない。しかし、松戸市における人口構造の予想推移によれば、近い将来、住人の4.5人に1人は、後期高齢者である⁵⁾。支え合う地域づくりが急がれるのであり、「第3次松戸市協働推進計画（案）計画期間平成29年度～平成32年度」⁶⁾の今後に注目されるのである。

平成27年4月に始まった「子ども子育て支援新制度」は、超高齢社会の次世代育成制度である。従来は公費補助対象とならなかったような、地域独自の多様な保育サービスの提供が可能となっている。聖徳大学短期大学部保育科は、保育者を志す若者の学び舎である。シニア世代、乳幼児とその保護者、学生と教員というように、幅広い世代が集い協働する場を地域に作り出す条件を備えている。

松戸市における祖父母（シニア）世代の子育て支援意識を探る調査は、以上述べたような課題意識をもって取り組むものであり、「子育てサポーター講座」のプログラムを、

地域における多世代協働に向けて発展・充実させるために行う基礎研究である。

2. 先行研究の検討

異なる世代相互の関わりについては、従来「世代間交流」というテーマで扱われてきた。そこで、まず、世代間交流への社会的関心の所在を確認し、次に祖父母（シニア）世代による子育て支援に主題を絞った先行研究の知見から学びたい。

(1) 世代間交流への社会的関心の所在

【村山らの研究】 社会的関心の所在をつかむ上で、有力な手掛かりを与えてくれるのが、村山ら「東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム」⁷⁾の研究である。1988年4月から2011年12月に至る期間に、全国紙3紙（朝日、読売、毎日）に掲載された「世代間交流事業」関連記事の数と内容を分析しており、それによって、交流事業に対する社会的関心の変化を捉えている。

記事数の推移を示すグラフからは、5点を減多に超えなかった掲載数が、1990年代後半から急増し、2002年の46点をピークに減少に転じたこと、その後2008年を境に反転して増え続けていることが分かる。

村山らはまた、テキストマイニング手法により析出した「構成要素」と「年代」（記事数が増え始めた1996年から4年刻みで4つの年代を設定：①1996年～1999年、②2000年～2003年、③2004年～2007年、④2008年～2011年）とのコレスポネンス分析を行っている。結果を示した布置図からは、「世代間交流事業」記事内容の、年代による変化がみてとれる。例えば、布置図に表された「1996年～1999年」の近くには、「ゲーム」「生きがい」「農業体験」「老人クラブ」「介護」などの構成要素が位置している。「2000年～2003年」の周囲にみられるのは、「お祭り」「地域」「小学校」「昔遊び」などである。

村山らは言及していないが、この布置図を年代ごとに細かく観察すると、「2008年～2011年」のすぐ脇に「保育園・幼稚園」と「祖父母」の二つの構成要素が、互いに近接して位置している。これは、この年代の世代間交流事業が、高齢者一般よりも「祖父母」に、そして、他の学校種よりも「保育園・幼稚園」と関連していたことを示唆する。

【CiNii 文献調査】 いま一つの手がかりとして検討したが、CiNii 収録論文のタイトルである。CiNiiには、これまでに発表された論文全てが載っているわけではない。過去に遡るほど収録漏れが多いし、重複登録もある。大雑把な方法ではあるが、それでも傾向をつかむことはできる。

そこで、平成29年2月5日、CiNii 検索機能を用いて、

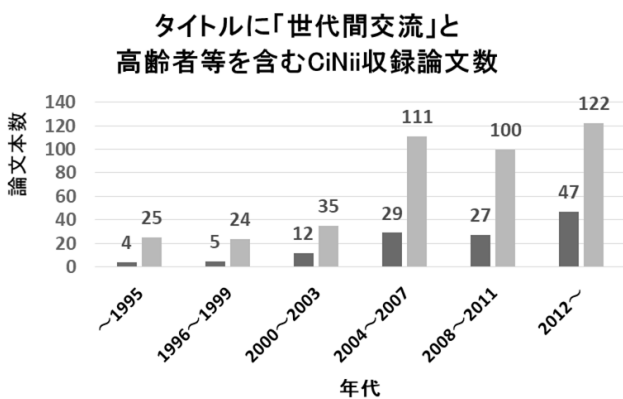
タイトルに「世代間交流」と「子育て支援」が含まれる論文を探した。世代間交流については417本、子育て支援は6515本の検索結果を得た。

次に、「世代間交流」417タイトルについては、本稿の目的に照らして、「高齢者」「祖父母」「シニア」「老人」の4語を「交流主体を指す用語」として選び、それぞれについて検索をかけた。得られた結果を合計し、村山らの設定した4つの年代とその前後に分けて示したのが図表1の濃い棒グラフである。色の薄い棒グラフは「世代間交流」のみを含む論文数である。重複カウントの恐れがあるが、シニア世代に関する論文が2000～2003年の落ち込みを除き相対的に増えていることがみて取れる。

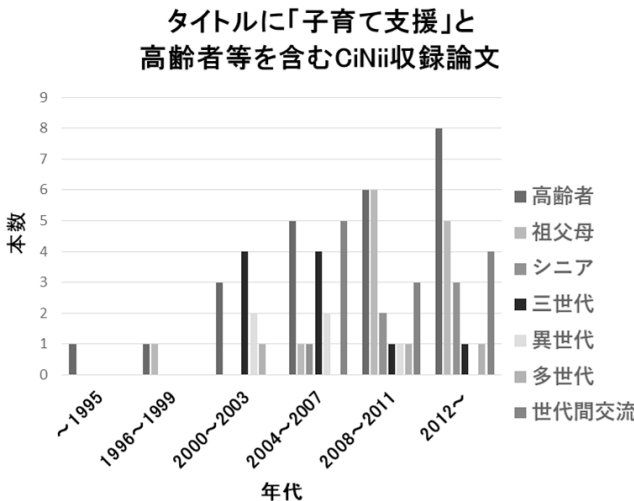
「子育て支援」については、シニア世代が支援主体としてタイトルに登場する論文に加えて、子育て支援が世代間関係の中で行われていることが予想される論文を探した。具体的には先の「高齢者」「祖父母」「シニア」「老人」と、「三世代」「多世代」「異世代」「世代間交流」を検索語として用いた。

図表2は、検索語ごとの登場件数を図表1と同様の年代

図表1. CiNii収録件数「世代間交流」×4検索語



図表2. CiNii収録件数「子育て支援」×7検索語



区分で示したものである。老人は1本のみだったため除外した。「子育て支援」をタイトルに含む論文数の増加が著しいため、相対的に増えているとは言えないが、シニア世代による子育て支援に対する研究関心の高まりは、十分にみてとれる。

(2) 祖父母(シニア)世代による子育て支援

祖父母(シニア)世代の子育て支援には、「血縁者としての支援」と「血縁者以外に向けた支援」とがあるが、本研究が対象とするのは、後者である。以下、本稿の主題に最も近いと思われる名須川らと北村の研究を取り上げる。

[名須川らの研究] 名須川ら(2015)⁸⁾は、兵庫県内の「祖父母世代」を対象に、子育て支援に関する意識調査を行っている。そこで明らかにされたのは、祖父母世代は、親族以外の子育て支援を望んでいるがきっかけが少ないこと、名乗りを上げるよりは依頼されるのを望んでいること、子育て支援スキルを身に付けたいと願っていること、気軽に出来ることで手助けをしたいという思いをもっていること等である。

名須川らは、同じ年にもう一つの論考、「子育て支援における祖父母世代のかかわりに関する研究－実践で学ぶ『まちの子育て師範塾』の事例から－」⁹⁾を発表している。兵庫教育大学で実施された公開講座(2008～2012年度)の記録である。50歳(年度により55歳)以上が受講条件で、定員は10名。幼稚園を会場に、実際に子どもと関わりながら実践的に学ぶことで、互恵的な世代間交流が見られたといい、名須川らは「このような子育て支援の方法は、多世代における子育ての力を形成することにつながり、地域コミュニティを醸成していくのではないだろうか」と総括している。

名須川らの取組みは、大学を拠点とする実践的な取り組みであり、多くの点で、本研究と課題意識を共有している。

[北村による研究] 2000年代の初めより、祖父母世代の子育て支援について、「血縁者として」、「血縁者以外に対して」の両側から取り上げ、時宜にかなった提言をしてきたのが「第一生命ライフデザイン研究開発室」の北村である。

北村(2004)¹⁰⁾は、2003年に50歳代～70歳代を対象に調査を行い、世代間交流の実態や、さまざまな施策に対する意識を明らかにしている。ここで北村が目にしたのは、子どもとの交流に関心をもちながらも機会のない層や、子ども世代に興味をもちふれあいに楽しみをみいだす層の存在である。「生きがい促進という視点に加え、子ども・若者など次世代に対するケアや、教育の担い手として彼らを積極的に活用するという視点も重要となる」というのが北

村の見解であった。

その4年後、北村(2008)¹¹⁾は再びシニア世代を取り上げ、地域の子育て支援に対する意識と、当該世代が関心を寄せる支援活動を探っている。北村によれば、若いシニアや子ども関連の仕事に就いた経験をもつ人では、特技・経験・趣味を通じた『テーマ型』の支援活動を志向する傾向があるという。それゆえ「シニア世代自らが自己実現をはかりながら、地域の子育てを支えていくような、新たな仕組みづくりが求められている」と述べる。貴重な知見である。

Ⅱ. 調査の概要と集計の結果

1. 調査の概要

(1) 調査協力者

「祖父母(シニア)世代の子育て支援意識」調査には、以下の二つのグループに協力いただいた。

一つは、先に紹介した聖徳大学公開講座の受講生(SOA会員)である。聖徳大学生涯学習課の協力のもと、担当講師の承諾を得られた講座の会場で、講義開始前に趣旨を説明して用紙を配付し、講義終了後に回収した。調査期間は、2016年1月下旬～2月上旬である。470通を配付し、380通を回収した。うち、松戸市在住者の回答は169通であった。

いま一つが、松戸市のファミリー・サポート・センター事業会員登録者(以下、ファミサポ会員)である。松戸市社会福祉協議会のご厚意で、同協議会発行の通信と共に提供会員・両方会員全504名に送っていただき、郵送法により195通を回収した。調査期間は、2016年6月～7月であった。

(2) 調査内容

調査用紙は、以下の(ア)～(ウ)の間からなる。

- (ア) 家族以外の子どもや若者との交流機会、交流それ自体への関心、色々な交流促進の取り組み(5種)への関心。
- 交流機会は、①就学前の子ども、②小学生、③中学生・高校生、④大学生を含む20～30歳代の若者のそれぞれについて、「1. よくある」、「2. ときどきある」、「3. あまりない」、「4. まったくない」のいずれか一つを選択。
- 交流への関心と、色々な取り組みについての関心は、「1. 関心がある」、「2. どちらかといえば関心がある」、「3. どちらかといえば関心がない」、「4. 関心がない」のいずれか一つを選択。交流への関心については、答えの理由を自由記述で尋ねた。
- (イ) 地域での子育て支援についての考え：12の項目につ

いて、重要と思うものを複数回答可で選択。さらに、同じ12項目について、参加の意向を尋ねた。

- (ウ) 回答者自身について：性別、年齢、婚姻状況、子どもの有無、同居者、職業の有無と形態。ボランティア経験とボランティアに対する関心の度合い、地域活動における報酬についての考えなどを聞いた。最後に自由に記述する欄を設けた。

上記の質問内容のうち、(ア)の項目は、先に取り上げた北村(2004年)を、(イ)は内閣府「家族と地域における子育てに関する意識調査報告書」(平成26年3月内閣府)を、(ウ)は内閣府「平成25年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」¹²⁾を参考に作成した。

2. 全国調査との対比でみた調査結果

(1) 方法

質問内容のうち、前述の(ア)について得られた結果を、調査紙作成時に参考にした北村(2004)の調査結果と比較する形でグラフ化した。

北村の調査協力者は、所属会社の保有する「生活調査モニター」である。モニターは、全国紙を通じた公募に応募し、複数年登録・回答を了承した18歳以上の5,000名弱からなり、全国をカバーしているという。

図表3は、松戸市調査と、北村による調査の回答者の性別と年代である。北村の回答者は、性別・年代別ともにはほぼ同数であるが、松戸調査では8割以上が女性である。そこで、本稿「Ⅱ2(1)方法」では、女性からの回答に限って作業を行った。

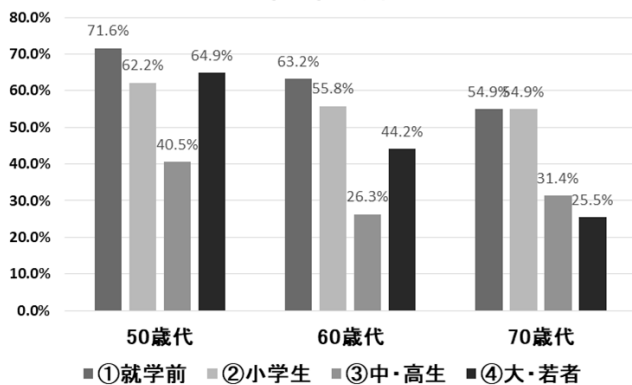
図表3. 回答者の性別と年代

	松戸シニア	北村シニア
男性50歳代	2	46
男性60歳代	16	51
男性70歳代	24	45
男性合計	42	142
女性50歳代	74	49
女性60歳代	95	49
女性70歳代	57	49
女性合計	226	147

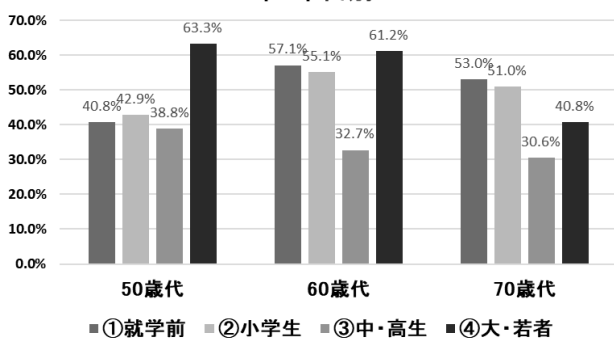
図表4と図表5は、松戸市調査と北村調査の協力者が、他の世代との交流頻度を尋ねた項目に、「よくある」「ときどきある」と回答した割合を、年代別に示したものである。

松戸市調査のシニア女性は、就学前の子どもや小学生と交流する機会が多い。特に50歳代の交流機会の多さは、北村シニアと比較して際立っている。これは、Ⅲで述べるように、回答者のおよそ半数がファミリーサポート会員であることによる影響が大きいと思われる。その一方で、

図表4. 松戸シニア女性の交流機会
2016年 年代別 n=226



図表5. 北村シニア女性の交流機会
2003年 年代別 n=147



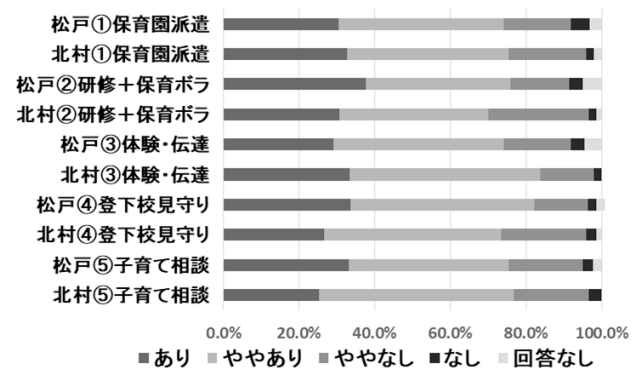
60歳代、70歳代の若者との交流機会は、北村調査に比べ、15%ほど少ない。その理由を説明する材料はないが、「子育てサポーター講座」の今後に示唆するところは大きい。

図表6は、松戸調査と北村調査のシニア女性が、5種類の世代間交流促進の取り組み（正確な文言は、本稿Ⅲ Table4に掲載）に寄せる関心を示したものである。二つの調査の実施時期には13年の隔りがあるが、調査結果は、1種類を除き、差がほとんど認められない。いずれの取り組みも、時代や地域性に関わりなく、広く支持されていることが分かる。

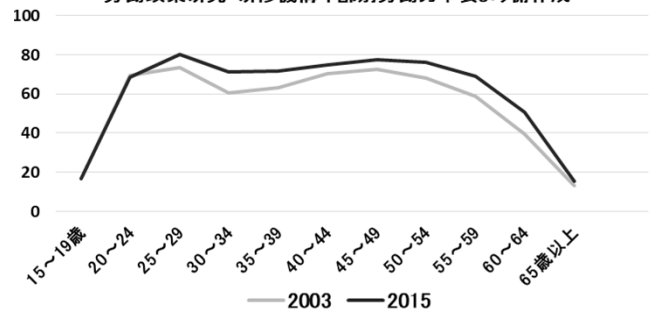
北村が調査を行った2003年以後の13年で、女性のライフサイクルは大きく変化した。図表7にみるように、女性の労働力率が伸び、子育て期の落ち込みも小さくなった。子育て支援が政策上の優先課題の一つとなり、子育て中の女性に向けた多様な支援プログラムが提供されるようになった。

二つの調査の結果に、こうした変化の影響がほとんど見られないのは、北村の調査協力者（生活調査モニター）の意識が、時代を先取りしていたからであろう。差のみられた「③学校等で体験、知識、技術の伝授」への関心の高さは、取り組み内容のマスコミ露出度の影響もあろう。村山らのテキストマイニングの布置図が、そのことを示唆している。

図表6. いろいろな取り組みへの関心
松戸シニアと北村シニア



図表7. 女性労働力率の変化 2003年と2015年
労働政策研究・研修機構年齢別労働力率表より補作成



Ⅲ. 調査結果 (2)

方法

回収した質問紙の内、年齢未記入、不完全回答を除いた268名を対象とした（内訳：Table1）。

Table1 対象会員別×年齢別サンプル度数

	50歳代	60歳代	70歳代	合計
ファミサポ会員	54	51	24	129
SOA会員	22	60	57	139
合計	76	111	81	268

結果

1. 子どもや若者との交流に及ぼすシニア世代の影響

(1) 子ども・若者との交流頻度

普段、家族以外に子どもや若者と接する機会がどのくらいあるかの質問に対して「よくある」4点～「まったくない」1点として得点化した。子ども・若者との交流頻度を従属変数とした会員×年齢の2要因分散分析を行い、交互作用のあったものには下位検定（TukeyのHSD法）を行った（Table 2, Table 3）。4つの異世代すべてに会員×対象者の年齢の交互作用は有意でなかった。会員の主効果は、就学前の子どもと小学生において認められ、ファミサポ会員の方がSOA会員より就学前の子どもや小学生と交流をもつ機会が多いことが明らかである。また、大学生を含む若

者との交流に年代の主効果が認められ、50歳代の人の方が他の年代に比べて大学生を含む20～30歳代の若者と交流をもつ機会が多いことが明らかである。

Table2 子ども・若者との交流頻度の平均値

	ファミサポ会員			SOA会員		
	50歳代	60歳代	70歳代	50歳代	60歳代	70歳代
	n	54	51	24	22	60
就学前の子ども	3.09(1.09)	2.92(0.89)	2.79(1.10)	2.45(1.06)	2.38(1.09)	2.07(1.07)
小学生	2.80(0.98)	2.71(0.99)	2.83(1.05)	2.41(0.96)	2.10(1.04)	1.93(1.03)
中学生・高校生	2.20(1.12)	1.86(0.94)	2.21(1.06)	2.32(1.04)	1.77(0.83)	1.67(0.87)
大学生を含む20～30歳代の若者	2.69(1.04)	2.31(1.09)	2.29(1.23)	2.86(0.94)	2.03(1.03)	1.70(0.80)

()内は標準偏差

Table3 子ども・若者との交流の頻度の2要因分散分析の結果

	会員の主効果	年代の主効果	会員×年代の交互
	F(1,262)	F(2,262)	F(2,262)
就学前の子ども	22.59***	n.s.	n.s.
小学生	22.56***	n.s.	n.s.
中学生・高校生	n.s.	n.s.	n.s.
大学生を含む20～30歳代の若者	n.s.	10.73***	n.s.

*** $p < .001$

(2) 子どもとの交流への関心

子どもと交流することへの関心の有無に対しての回答を「関心がある」4点～「関心がない」1点として得点化した。子どもとの交流の関心の程度を従属変数とした会員×年齢の2要因分散分析を行った結果、会員の主効果のみ有意であった ($F(1,262) = 42.66, p < .001$)。ファミサポ会員 ($M=3.62, SD = 0.58$)の方がSOA会員 ($M=2.87, SD = 0.93$)に比べて子どもと交流することに関心が高い。

(3) 世代間交流への関心

中高年・高齢者による子育て支援に関する取り組みへの関心の有無に対しての回答を「関心がある」4点～「関心がない」1点として得点化した。世代間交流促進の取り組みへの関心度を従属変数とした会員×年齢の2元配置の分散分析を行い、交互作用のあったものには下位検定 (TukeyのHSD法)を行った (Table 4、Table 5)。

①「地域の中高年や高齢者を保育園に派遣し、保育の補助をしたり、園舎の修繕や庭木の世話などの作業を手伝う」は会員の主効果が有意で、

ファミサポ会員がSOA会員よりも関心が高かった。②「中高年・高齢者を対象に保育の研修を実施し、地域の保育・子育てのボランティアとして登録する」は会員、年齢の交互作用が有意であった。単純主効果検定より、ファミサポ会員がSOA会員より関心が高く、50歳代、60歳代のファミサポ会員に、有意に子育て支援への取り組みへの関心が高い傾向が認められた ($p < .01$)。③「地域の中高年や高齢者が、幼稚園・保育園や小中学校の授業で、仕事に関する体験談を話したり、趣味などの知識・技術を教えたりする」は会員の主効果が有意で、ファミサポ会員がSOA会員よりも関心が高かった。

④「地域の中高年や高齢者が、小中学生の登下校時の安全を守るために、声をかけたり付き添ったりする」は会員の主効果が有意で、ファミサポ会員がSOA会員よりも関心が高かった。⑤「地域の中高年や高齢者が、子育て中の両親に対して、子育てに関する相談相手になる」は会員、年齢の交互作用が有意であった。単純主効果検定より、ファミサポ会員がSOA会員より関心が高く、特に60歳代、70歳代のファミサポ会員に、有意に子育て支援への取り組みへの関心が高い傾向が認められた ($p < .01$)。

Table4 世代間交流の取り組みへの関心(中高年・高齢者による子育て支援)の平均値

	ファミサポ会員			SOA会員		
	50歳代	60歳代	70歳代	50歳代	60歳代	70歳代
n	54	51	24	22	60	57
地域の中高年や高齢者を保育園に派遣し、保育の補助をしたり、園舎の修繕や庭木の世話などの作業を手伝う	3.20(0.63)	3.24(0.89)	3.21(0.82)	2.77(1.02)	2.67(0.84)	2.28(0.90)
中高年・高齢者を対象に保育の研修を実施し、地域の保育・子育てのボランティアとして登録する	3.31(0.64)	3.55(0.67)	3.33(0.87)	3.05(0.90)	2.45(0.93)	2.12(0.93)
地域の中高年や高齢者が、幼稚園・保育園や小中学校の授業で、仕事に関する体験談を話したり、趣味などの知識・技術を教えたりする	3.20(0.81)	3.12(0.79)	3.13(0.85)	2.73(0.99)	2.57(0.87)	2.46(0.89)
地域の中高年や高齢者が、小中学生の登下校時の安全を守るために、声をかけたり付き添ったりする	3.31(0.61)	3.20(0.83)	3.25(0.85)	2.82(0.91)	2.83(0.87)	2.77(0.89)
地域の中高年や高齢者が、子育て中の両親に対して、子育てに関する相談相手になる	3.17(0.80)	3.20(0.78)	3.29(0.96)	2.91(0.87)	2.68(0.93)	2.26(0.99)

()内は標準偏差

Table5 世代間交流の取り組みへの関心(中高年・高齢者による子育て支援)の分散分析の結果

	会員の主効果	年代の主効果	会員×年代の交互作用
	F(1,262)	F(2,262)	F(2,262)
地域の中高年や高齢者を保育園に派遣し、保育の補助をしたり、園舎の修繕や庭木の世話などの作業を手伝う	31.36***	n.s.	n.s.
中高年・高齢者を対象に保育の研修を実施し、地域の保育・子育てのボランティアとして登録する	61.55***	5.03**	6.59**
地域の中高年や高齢者が、幼稚園・保育園や小中学校の授業で、仕事に関する体験談を話したり、趣味などの知識・技術を教えたりする	24.63***	n.s.	n.s.
地域の中高年や高齢者が、小中学生の登下校時の安全を守るために、声をかけたり付き添ったりする	16.72***	n.s.	n.s.
地域の中高年や高齢者が、子育て中の両親に対して、子育てに関する相談相手になる	25.77***	n.s.	3.26*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

2. 地域での子育て支援に対するシニア世代の意識

(1) 地域で子育て支援を支えるための重要項目

地域の子育て支援を支えるための12項目について、重要だと思うものを選択することを求めた (Table 6)。両会員を χ^2 検定により比較した結果、12項目中9項目で人数の偏りが有意であった。ファミサポ会員の方が子育てに関して人と場の確保の充実を望んでいることが明らかとなった。

また、年齢を χ^2 検定により比較した結果、「子育てに関する情報を提供する人や場がある」($\chi^2(2) = 7.07$,

$p < .05$; 50歳 > 60歳, 70歳) で人数の偏りが有意であった。50歳代は、他の年齢に比べて子育ての情報を提供する人や場があることが、地域で子育てを支えるためには重要であると考えている者が多いことが明らかとなった。

(2) 地域社会でシニア層が参加したい活動

地域の子育て支援で担い手として参加したいと思う活動12項目について選択することを求めた (Table 7)。両会員を χ^2 検定により比較した結果、12項目中7項目で人数の偏りが有意であった。ファミサポ会員の方が地域社会で子育てを支える活動の担い手として参加したいと前向きに

考えていることが明らかとなった。また、年齢を χ^2 検定により比較した結果、「子育てをする親同士で話ができる仲間づくりの活動」($\chi^2(2) = 9.34$, $p < .01$; 50歳 > 60歳, 70歳)、「子育てに関する情報を提供する活動」($\chi^2(2) = 11.60$, $p < .01$; 50歳 > 60歳, 70歳) で人数の偏りが有意であった。50歳代は60歳以降の年齢に比べて地域で子育てに関する活動に参加したいと考えている者が多いことが明らかとなった。

(3) ボランティア参加との関係

ボランティア活動に参加している人は地域での子育て支援にどのような考えをもっているかについて検討した。ボランティア活動の参加の程度について「参加したことがない・1, 2度参加したことがある」を参加低群、「不定期に何度も参加した・定期的に参加している」を参加高群とした。子ども・若者との交流頻度、子どもと交流することに対する意識 (子どもと交流することや世代間交流の取組に対する関心度) について、ボランティア活動参加の程度 (参加低群・参加高群) を独立変数とする1元配置の分散分析を行った (Table 8)。ボランティア活動の参加頻度が高い人は、低い人と比べて子どもや若者との交流、特に就学前の子どもや小学生との交流頻度が高く、子どもとの交流に対して関心が高い。さらに、世代間交流促進のための取組に関心ももっていることが示された。

孫育てを血縁関係にある祖父母にとどまらず、子育てを終えたシニア世代が孫世代にかかわるという世代間交流が行われている地域も、現在多くなっている。シニア世代のマンパワーを子育てに活かしていく場合は、血縁関係にない孫世代と関わり、親世代の子育ての支援を行うと

Table6 地域での子育て支援で重要なこと

	ファミサポ会員 (n=129)	SOA会員 (n=139)	χ^2 値
子育てに関する悩みについて気軽に相談できる人や場がある	106	92	8.86 **
子育てをする親同士で話ができる仲間づくりの場がある	86	77	3.57 *
子育てに関する情報を提供する人や場がある	68	60	2.45
子育て家庭の家事を支援する人や場がある	70	43	14.93 ***
不意の外出や親の帰りが遅くなった時などに子どもを預かる人や場がある	103	82	13.61 ***
子どもと一緒に遊ぶ人や場がある	58	41	6.87 **
子どもにスポーツや勉強を教える人や場がある	57	42	5.61 *
地域の伝統文化を子どもに伝える人や場がある	50	48	0.52
子どもに自分の職業体験や人生経験を伝える人や場がある	32	28	0.84
小中学校の校外学習や行事をサポートする人がいる	55	35	9.14 **
子どもの防犯のための声かけや登下校の見守りをする人がいる	89	78	4.72 *
子どもと大人と一緒に参加できる地域の行事やお祭りなどがある	66	52	5.14 **

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table7 地域社会における子育て支援に参加したいと思う活動の種類

	ファミサポ会員 (n=129)	SOA会員 (n=139)	χ^2 値
子育てに関する悩みについて相談にのる活動	52	30	11.05 **
子育てをする親同士で話ができる仲間づくりの活動	31	20	4.04 *
子育てに関する情報を提供する活動	25	15	3.89 *
子育て家庭の家事を支援する活動	45	13	25.72 ***
不意の外出や親の帰りが遅くなった時などに子どもを預かる活動	75	31	35.94 ***
子どもと一緒に遊ぶ活動	39	25	5.52 *
子どもにスポーツや勉強を教える活動	21	16	1.28
地域の伝統文化を子どもに伝える活動	10	16	1.08
子どもに自分の職業体験や人生経験を伝える活動	10	14	0.44
小中学校の校外学習や行事をサポートする活動	30	23	1.9
子どもの防犯のための声かけや登下校の見守りをする活動	60	47	4.5 *
子どもと大人と一緒に参加できる地域の行事やお祭りなどを行う活	35	33	0.41

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table8 ボランティア活動参加者の意識

	n		F値
	参加低群 152	参加高群 103	
1. 子ども・若者との交流			
就学前の子ども	2.36(1.14)	2.94(0.98)	17.84 ***
小学生	2.14(1.04)	2.81(0.96)	26.82 ***
中学生・高校生	1.81(0.92)	2.13(1.05)	6.54 **
大学生を含む20~30歳代の若者	2.09(0.98)	2.48(1.15)	8.40 **
2. 子どもと交流することに対する関心			
	3.03(0.94)	3.50(0.68)	18.38 ***
3. 世代間交流促進の取組			
地域の中高齢者や高齢者を保育園に派遣し、保育の補助をしたり、園舎の修繕や庭木の世話などの作業を手伝う	2.66(0.89)	3.09(0.95)	13.10 ***
中高年・高齢者を対象に保育の研修を実施し、地域の保育・子育てのボランティアとして登録する	2.60(0.97)	3.25(0.87)	30.18 ***
地域の中高齢者や高齢者が、幼稚園・保育園や小中学校の授業で、仕事に関する体験談を話したり、趣味などの知識・技術を教えたりする	2.59(0.88)	3.21(0.80)	32.96 ***
地域の中高齢者や高齢者が、小中学生の登下校時の安全を守るために、声をかけたり付き添ったりする	2.89(0.86)	3.19(0.81)	7.89 **
地域の中高齢者や高齢者が、子育て中の両親に対して、子育てに関する相談相手になる	2.64(0.97)	3.15(0.88)	18.19 ***

** $p < .01$ *** $p < .001$

いう視点が重要となろう。そこで、本調査では、松戸市のファミリーサポート会員と自分の興味を活かした活動の充実を目指した講座を受講しているSOA会員を対象に地域社会の子育て支援への参加に関する意識調査を実施した。その結果、ファミリーサポート会員の地域社会における子育て支援に対する意識が高いことが示された。今後はシニア世代の孫世代との交流をさらに促進するための方策を検討していく必要がある。

注

- 1) 梶瑞希子、藪中征代：松戸市における「子育てに関する調査」(H26年)の結果にみる支援ニーズ『教職実践研究』6, 15-35, 2016.
- 2) 事業の詳細は、本学知財戦略課・地域連携課のサイトを参照されたい。(http://www.seitoku.ac.jp/chizai/)
- 3) 保育所待機問題の現状と今後の対策については、首相官邸HPを参照(平成29年2月1日取得)。
http://www.kantei.go.jp/jp/headline/taikijido/
- 4) 厚生労働省「待機児童解消に向けた地方自治体における取組事例横展開会議」(平成28年12月9日)松戸市プレゼンテーション資料(平成29年2月1日取得)。
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/matsudo.pdf
- 5) https://ecitizen.jp/Population/City/12207 参照。
同サイトは、独立行政法人統計センターが「政府統計データAPIを利用して統計表の一覧をブラウザ上に表示させるサービス」と紹介している。
- 6) 松戸市「第3次松戸市協働推進計画(案)計画期間平成29年度～平成32年度」平成29年2月。
https://www.city.matsudo.chiba.jp/shiminnokoe/.../kyoudousuisinnkeikaku_3.pdf(平成29年2月10日取得)
- 7) 村山 陽[他]「世代間交流事業に対する社会的関心とその現状：新聞記事の内容分析および実施主体者を対象とした質問紙調査から」『日本公衆衛生雑誌』60(3), 138-145, 2013-03-15.
- 8) 名須川知子他「世代間交流としての子育て支援に関する研究－祖父母世代の意識調査から－」『兵庫教育大学研究紀要』47, 11-18, 2015-09.
- 9) 名須川知子他(2015)「子育て支援における祖父母世代のかかわりに関する研究－実践で学ぶ「まちの子育て師範塾」の事例から－」『兵庫教育大学研究紀要』46巻 pp21-30.
- 10) 北村 安樹子「シニア・シルバー層の世代間交流の実態と意識」ライフデザインレポート(163), 24-31, 2004-09.ここに掲載されていないデータと「生活調査モニター」

に関する情報は、北村氏より直接提供を受けた。

- 11) 北村 安樹子「子育てをめぐる世代間関係－地域の子育て支援に関するシニア世代へのアンケート調査より－」ライフデザインレポート(188), 24-31, 2008-11.
- 12) 内閣府『家族と地域における子育てに関する意識調査』平成25年度調査票。
- 13) 内閣府(2015)『平成26年度版高齢社会白書(全体版)』(平成27年4月21日取得)。
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/26pdf, pp.34-38.